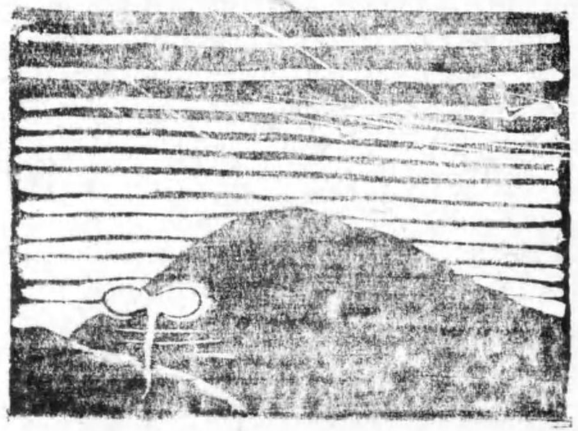
始

あかつき

・AKATUKI・



序

私共が思想、感情、研究等を發表し、又受け容れる方法としては、言語、身振り、表情、文章、詩、蓄音機、ラヂオ、トーキー、音樂、寫眞繪畫、圖解、等いろ〳〵あります。

版畫は繪畫の一分野であるが、最も素朴で、單純で、表はさうとするものを單的に表出することが出來、而も日本の情緒を表現するに適した藝術であると謂ふことが出來ませう。

文や詩と繪畫を結ぶことは繪卷物として我國では隨分古くから行はれたものですが、近頃は子供繪卷の研究から、又綜合表現の一手段としての教育から、全世界に波打ちつゝある大きな問題となつてゐます、

版畫集「あかつき」を拜見して、郷土の風物への憧れ、各種産業への關心、春夏秋冬、朝昼夕等の變化に對する仔細な觀察、日常生活に對する深き洞察、旅行地への感銘、思索的、迷想的、世界の形象化等、皆さんの畫境、詩境の豊かなのに魅了せられました。

私が郷土風景と題し版畫を通して趣味の郷土讀本を上梓してから、既に二年餘經過しました、其の後版畫教育は益々盛となり、波崎風景（茨城縣）木造風景（青森縣）大分風景（大分縣）中津風景（大分縣）阿波風景（徳島縣）高山風景（岐阜縣）等々各地で似よりの仕事が計畫されてゐます。又文部省に於て新圖畫教科書の高一教材として版畫を課する事になりましたのも、時代の趨勢、時代の要求、を物語るものだと思ひます。

どうか皆さんはこの意義ある仕事を單なる若き日の記念塔に留めず、かうした氣持と腕の育成に精進し末永く生活の伴侶として下さい。

一言所感を記し「あかつき」の門出を衷心から御祝ひいたします。

昭和十年六月二十八日

山梨縣師範學校教諭
矢崎好幸

尊い思ひ出

私達にとつて伸びること、飛躍することそれは何物にも代へ難い大きな喜びであります。つまりこれは一時も停滯してはならない事を意味するものであつて、私達の生活向上の基準となるべきものであります。

そこで私達は何時も堅實な歩を續けて行かなければならないので、その時、その時の生活の足跡を、何等かの形式に於て殘して置く事は非常に大切なことであります。

この意味から、此の版畫集は皆さんの最善の努力の結晶であり又美的生活の立派な所産であると同時に、皆さんの人生の一頁を物語る懷しい日記でありまして、將來必ずや皆さんの心と心とを結びつけてくれる、尊い一つの大きな力となる事を信じて心から先生と、そして皆さんとに御喜の言葉を申述べます。

昭和十年六月十四日

山梨縣女子師範學校教諭
土屋博雄

序にかへて

日本は神の國、武の國であると同時に又美の國であります。自然を崇び、花鳥を愛し、庭園を造り、繪畫を好むのは我が國民性の長所であつて、特に藝術を喜ぶ風は、神代から傳はり養はれて來たものと言はれて居ります。

此の版畫集を見ましても何處かに貴い日本精神が現はれてゐるやうに想はれます。

そして又めい〳〵の貴い個性が動いて居るやうに見え畫と技術とを透して、其の人の性質が或程度まで窺ひ知る事が出來ます。

藝術を讃美する國民、美を認識する國民でなければ大國民とは言はれないと念ひます。

此の畫集は技術や出來ばへよりも、童心の發露と努力の結晶と言ふ方面から眺めて、眞に喜ばしい感じが致します。

昭和十年補公六百年記念祭の日

鰍澤尋常高等小學校長
窪田德造

「あかつき」を語る

渡邊幾三

——兒童へ——

皆さんの成人を指導し、祝福してくれた
山梨男子師節學校教諭　矢崎好幸先生
山梨女子師範學校教諭　土屋博雄先生
鰍澤小學校長　窪田德造先生
から序文が載けた事は何よりの誇りである。
皆さんと「あかつき」を發行すべく計劃したのは昨年の十二月だつた。
手工貯金の控を失くした
係が轉校する
集めた金が足らん
金が多すぎて勘定が合はん
版木を失くした
刷るには刷つたが氣にいらん
手刷百枚はとてもえらい
一頁の組版代は幾らだ
百頁になるとしたら幾らかゝる
表紙の色合や厚さをどうしよう
Aが欠席して今日も仕事が片附かん
等々「あかつき」が生れ樣として生んだ道德、經濟、美的感情などを身に行つたのである。
顏を剃るのに正宗の名刀はいらんが、道を拓くのに匙一本でも困る。
自分の力を廣い世の中に見出して、それ相應の機構の中に生きて出來たのが此の「あかつき」だ。形になる迄の
手の香り
頭の匂ひ
それを何年迄も何年までも失くさぬ樣に成人した後も時々頁を繰ることを忘れないでくれ。

——見てくれる人へ——

立派な版畫、奇麗の文章、私は計劃の當初からそれを望んでは居なかつた。
思索し、思想し、計劃し、實行して人格的に、思索、思想、計劃、實行、を喰ひ込ませろばよかつたのである。
隨つて私は兒童自身のあらゆる活動を私自身の考へで、批正は勿論批判きへ與へずに居た。

「あかつき」は兒童の上に立つ、美的情緒を兒童の力によつて兒童自ら發展せしめ樣としたゞけだつた。兒童は「あかつき」に自分の美的感情を滿足せしめ樣として、それに限られて居た總ての實際生活を經驗したのだつた。
かうした學習が各敎科に繰返へされる事によつて、小學校を舞臺としての人間生活の幕が終了せられるのだと考へる。

小さい花にも、見る人によつて涙をもつてしても測り知れないものがある樣に、この「あかつき」にも、見て呉れる人によつて生かして頂ける点がある筈だから、益々太らせ度いものである。
兒童營爲を眺める者として次回には彼等の、產業への關心、鄉土への心やり、若さに躍る心の描寫、等々各人が各樣に、世のあらゆる事柄を道として、美しき魂の祠に通ずる事が出來る樣に仕向け度い。

不出來を知る者は伸び得ると聞いて嬉れしい。

たんぽぽ

高一　埼原房造

人にふまれた、たんぽぽが。
道のはぢに、さいてゐた。
きれいに花を、ひろがらせ。
春の薄日に、あたつてた。

高一　早川春雄

一、のぼる〳〵朝日がのぼる
海も靜かに
にはとりの聲

二、兄弟のにはとりが
海べに立ちて
朝日とわらふ

三、にはとりが
ふをひらふ
春の朝

二見ケ浦

高一　秋山正三

朝五時に起き、皆と一しよに海岸へ出た。薄黒い雲が横にたなびいて、潮の音がざぶり〳〵きみわるく聞える。他校の人達も澤山來てゐた。少し海を見てから、濱千代館の前に列んだ。いよ〳〵夫婦岩さして急いだ。皆の話聲が、入り乱れて聞える。どうやら今まで薄暗かつた町も、明るくなつた。他校の人達も見に來てゐた。もう歸る組もある。鳥居をくゞつて少し行くと、まちかねてゐた夫婦岩が目の前にあらはれた。勢よく波が岩に當つて飛び散る樣はなんともいはれない光景だ。僕は六年の時教はつた、鳴門の歌を思ひ出した。思つたよりも夫婦岩は小さかつた。みんな、がや〳〵騒いでゐる。青黒い水がうねつてゐて、まるで何かいつてゐるやうだ。太い綱に注連がつるさつてゐる。沖の方を船が走つてゐる。太陽が夫婦岩のまん中から出ると思つたが、まん中からは出ず横の雲にかくれて薄ぼんやり見える。皆のはしやいでゐる中に鳴門の歌を歌ふ聲が聞える。

一刻の梅の花

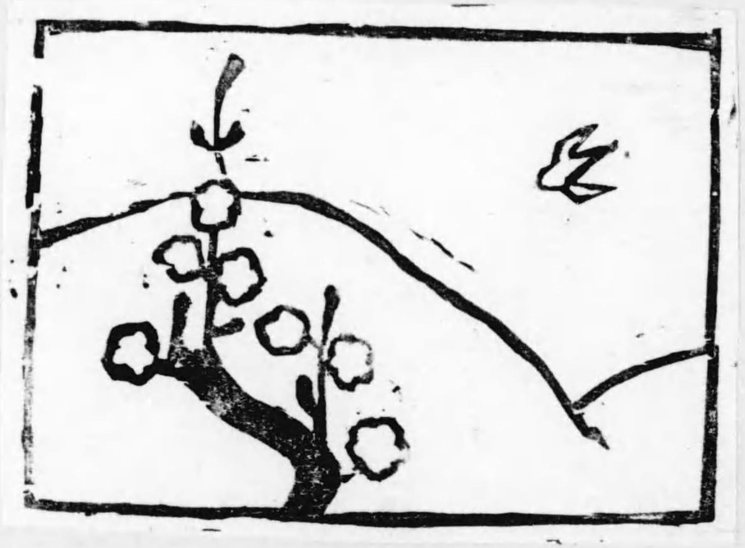
高一　秋山貞二郎

ぽか〳〵暖い春の日に、梅のつぼみがひらいて大空のはてからはてにと見廻してゐる。ひゅうと突如風を切る音がした。

見ると一羽の鳥が雄大に羽根をひろげて、いまひらいたばかりの梅の花に向かつて猛進して來る。

僕ははつと思つた。

いつしか鳥の姿も見えず、ただ梅の花がひら〳〵と舞ひ落ちて行くだけであつた。



夜明け前

高一　青柳保男

ごうー　ごうー

と、山の木が鳴る響きに目がさめた。うつとり目をあくと、西窓のやぶれから青白い月光と共に風がふきこんで來る。外は大分風が強いやうだ。人の足音もしなければ犬の鳴聲もしない。

深夜だ。唯鳴る風の音だけが惡魔が我が身をおそうかの如く聞える。屋根の上を一陣一陣の風が吹きまくつて行く。そつと起きて小便ひりに外へ出ようと、ひよいと雨戸を開くと、びゆーう、と吹いて來た風が顔にあたつて家の中へはいつて障子をたたく。おゝさむい。雨戸のかげへかくれてゐる。と又びゆーうと風が吹き去つた。外へ出て空をながめると、鎌のやうな月が西の空に光つてゐた。小便をひつてから、しばらくあたりをながめてゐた。冬の夜はものすごい。ごうーごうーとなる風の音にさへぎられて遠くかすかに犬の鳴聲が聞えて來る。

曉の雲吹き拂ふ木枯しに
　　輝く星の影のさやけさ。

と昭憲皇太后の御歌の通りだ。

竹やぶが眞黑くかたまつて次第にこつちへ近づくやうに見える。内へ入つて蒲團の中で雜誌をよんでゐると時計が五時を打つた。

富士山

高一　中込武雄

富士山は冬はずつと白い着物を着て、春になればぬく〳〵と太陽にてらされて、なんとなくゆくわいにそして又悠然とすそをひく。富士は昔はすばらしい火山であつたさうだ。その富士はやはり昔のおもかげをのこしてゐる甲斐に富士がある事はなんとなく力強く思ふ今朝も富士を見た。まだ雪がのこつてゐた。春になつても富士山の雪はとけないと思ふと富士山の上はどんなに寒いだらうと思ふ。又富士は甲斐に長くその雄姿をのこしてゐるだらう。

雪の朝

高一　芦澤峯雄

家はあかるき
雪の朝
しようじあければ
風寒し
庭のなんてん
雪おもく
家はあかるき
雪の朝

たんぽゝ

高一　一之瀬定男

道ばたの草の中に
咲いてゐるたんぽゝを見てゐると
暖かい風が何處からかふいて來て
春の靜かな空氣とともに
若草のにほひが流がれて來た。

正月の午後

高一　石川文夫

學校から歸つて來ると隣のゲーム取と親類の姉さんが居た。そして今お茶をのんで居る。餅を燒いて食べたらしい。一つのこつてゐる。それを見ると急に食べたくなつたので燒いてゐると弟も歸つて來た。

其の時誰か來た樣だ。母は其の人とあいさつをして、其の人は內へ入つて來る。下山村の二三郎兄さんであつた。今までお茶をのんでゐた二人は行つてしまつた兄さんは數年前から小井川局につとめてゐる話によれば二三郎兄さんの弟、近政兄さんが鹽山へ大工をならひに行つてゐたが、正月で下山へ歸つたのだが今日鹽山へ歸るのだ。餅が燒けたのでお茶菓子のかはりに出した。小井川局で增穗の局へ用事があつた。其の用事に二三郎兄さんが來ることになつたので下山へ電話をかけた。「歸りに鰍澤の親類による樣に」と增穗まで自轉車で大急ぎで來て用事をすました後俺の家へ來たのだ、お茶をのみながら話をしてゐると近政兄さんが來た。大そう持物をしてゐる。母がしることを出して呉れた、まだ大へん熱いそれをのんだ、だが熱すぎてのどを通らない。出す場所もない。進退きはまつた。しるこが口の中をうろついてゐる中にさめた。おかげで舌を燒けつつりしてしまつた。墓參りもすまし、夕食もすまして、兄さん達を途中までおくることにした。二三郎兄さんは自轉車だからすぐ行つた。近政兄さんを新田の乘場までおくつた。妙法神の坂を上りつめると眼界は開けて甲府盆地が一目に見える。だが夕餉の煙でぼうとしてゐる。今まで暖い所に居て暖い物を食べたり、のんだりしたので體がほか〳〵してゐる。それへつめたい風がほゝをなぜるので、涼しい樣な寒い樣な感じがする。もう薄暗くなつた。戶川には水がない樣だ。修繕したばかりの橋を通つて兄さんを乘場までおくつて、弟と二人で家に急いだ。家についた時は暗くなつてしまつた。

夫婦岩

高一　望月義雄

(一)

明けゆく空よ
夫婦岩の間から
太陽の出る頃よ。

(二)

夫婦岩の間から
赤々照す太陽
おゝ大和心よ。

(三)

明けた空には
雲二つ
大きな岩は夫婦岩。

富士川

高一　山下　弘

ぷか〳〵浮かぶ
富士川の
波にゆられた
草木など
舟もうかべる
廣い川
朝日ののぼる
富士山の

富士山の
ふもとの下は
舟遊び

高一　樋口峰雄

二見ヶ浦

高一　柳澤定雄

一、今日も行く行く
　二見ヶ浦へ
　二つの岩へと
　指さし行くよ

二、今日も行く行く
　二見ヶ浦へ
　國内照す
　日の出
　おがみに

夫婦岩

高一　芦澤立男

五時過ぎごろ起きた。宿屋のうらはすぐ海だ。朝飯を食べて海のほとりに出る。松林のうす暗いような所を出るとすぐ波うちぎはになつてゐる。ぽつ〳〵明け方になる。ざざゝゝとよせてはかへし、かへしては寄せてあかるくなる海のかなたに波のうねりが見える。何もない海の上にぽぽゝゝと音を立てゝ遊らん船が走る　波がさゞめき遊らん船のきてきの音、なんともいはれない心持だ。後から又一せき波をけたてゝ進んで來る。僕だちのすぐ目のそばに棧橋のやうな形をした石垣がつんである。そこへ來るといかりを下してとまつた皆と一しょに波のさざめく音を聞きつゝ夫婦岩を見に行く、沖の方から大波がおしよせるとすぐそばの石にあたつて飛びちる、遊らん船のきてきの音が明け方の海にひゞく、岩のへこんでゐる所へ波がよせては窟の中まで青みをおびた水がながれこむかの如く深く入りこむ。そばの岩にあたつて飛びちるそのたびごとに胸がをどる、岩の突出したのを通りこすとすぐ前に夫婦岩が見える。しやしんで見たのとすこしもかわつてはいない。雲の間から太陽がながめ下して朝日がうすく水平線に落ちる、大波の夫婦岩にあたると夫婦岩がしぶきをあびる。その壯快さは口ではつくしきれない。遊らん船がぼゝゝとすぎて行く。五年の連中が波のもつて來た貝を水をあびても一生懸命でひろつてゐる。時間がないので波のさゞめく音をききつつ宿屋へもどつた。

竹さがし

高一　海野金吾

長い道だなー
日光は、こう〳〵と照る
汗をふきとつて又歩く
向ふに竹の葉が見える
「あゝ」ようやくあつた。

春の夕暮

高一　芦澤良雄

日一日々々とたつて行くにつれて氣温はだん〳〵あたゝかくなつて來る。夕暮に吹く春風に木々は皆枯葉を落して、さつぱりと、又さびしくも見える。

と、東山の方より雀が二羽飛んで來た。親子雀であらう。一山こして向ふへ飛んで行つた。

其時北風がひゆうと通つた。其の度に木々は「ガサ〳〵」と鳴る。

あたりはぼんやりとして來、向ふの山も、こつちの山もうすぼんやりとして來た。又風がひゆつと通つた。木々がゆすれる度に「ガサ〳〵」と枯葉が落ちる音がきみ惡く聞えて來る。

ふと氣がつくとあたりはもうすぐらくなつて風もつよくなつて來た。

夫婦岩

高一　中村三男

寝むい目も
急にさめたり
夫婦岩

夫婦岩
朝の混雑
四日市

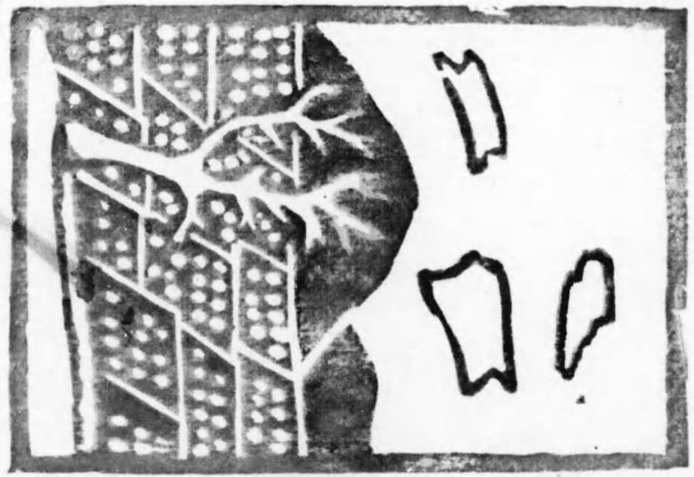
進め農業

高一　芦澤正雄

1、進め農業我等の心
果なき原野に
働らく農夫
明日の榮も
農業にあり

2、護れ農業我等の心
日本を護るも
農業の力
明日も耕せ
農夫だち

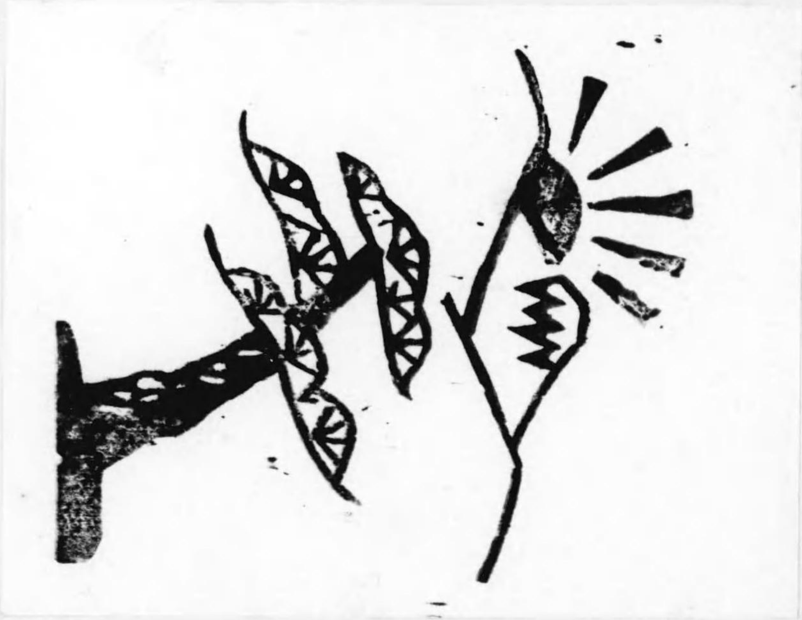
3、進め農業我等の心
はげめ農業に
精出して
東洋を護るも
農業の力



朝日

高一　遠藤民男

さわやかにのぼる
朝日に手をあわせ
しみじみ思ふ
ありがたさ



電車で見た富士山

高一　石坂正一

高い〳〵富士山青空を高く
　突いてゐる
電車の窓から眺ると
富士山も近く我等を見下して
我等の行方をながめてる
　日本一の富士山
見れば見る程美しい。

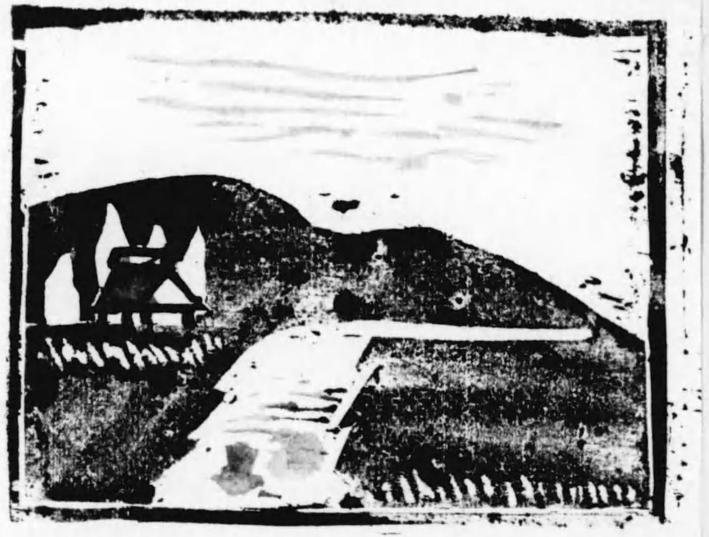
高一　石坂　透

春

水の音
さびしき春の
夕べかな

川

川しもの
舟ながめゐる
一軒家



高一　村上利夫

春

野山にさえづる
うぐひすの聲。

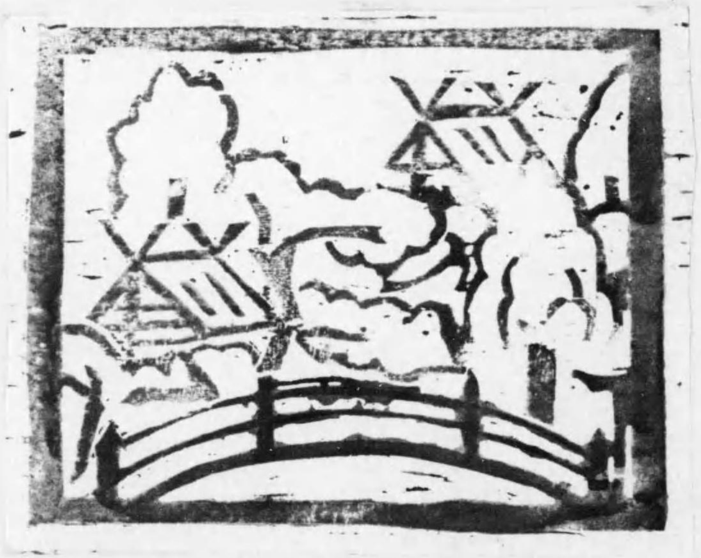
冬

いつもま白な
富士の山。

伊勢詣り

高一　青柳雅夫

五十鈴川で手を清め
玉砂利ふんで鳥居をくぐる
空にそびゆる御神木
神殿の御前にぬかづいて
柏手うつていのりをさゝぐ
神代の思ひひたすらに



高一　志村芳次

草取や富士をながめて一やすみ

竹やぶをゆする人あり風の音

西のお山は夕やけで
　寒むいやうな自轉車一だい
　木は一面うごいてる。

あゝ雪だ、又からすが
　西の方からにげてきた。

えんとつ長いな
　又けぶがでた、夕やけ。

又風が吹くさむいやうなこうふん
　又一人男の人が通つた。

一本松

高一　野中　辨

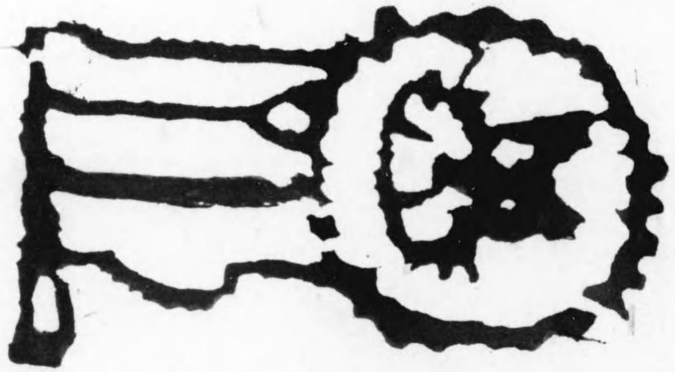
新居林に上る途中、一本松といふ大きな松の木がある。何時植たかしらないが、とても大きなすじようのよい木で、枝が四方に廣がり、新居林や梅久保などへ上る人はいつでも休んでゆく。ことに風がふいてすゞしいので、村の人達はそこへ大きな四角の石を並べて休場をこしらへた。僕達は通るたびに此處で休んでゆく。

前の方は富士川が流れて法師倉や大木なども見える。鰍澤も見えるし青柳まで見える。よく晴れてゐる時は甲府盆地が一目で見える。甲府の謝恩塔までがほのかに見える。

どこの人だかしらないが夏などは此處で休みながら「あゝ涼しい、大きな松だなあ」などといふそんな時は僕達は偉い氣になつてしまふ。冬の日などはあまり休まないがそれでも何かしよつてゐる人や手に荷物をもつてゐる人は休んでゆく、おまけに此處は鬼島と新居林のまん中である。僕達はいつまでも此の松を大切にし、まもるつもりだ。

高一　有泉芳男

一、此のライオンを見よ
　こんな優しいライオンが
　一度おこれば毛をたてゝ
　世界の人をおどろかす
二、こんなすごいライオンが
　一度優しくなれば
　どんな小さなけものが
　そばによつてもおこらない
　此のライオンを見よ

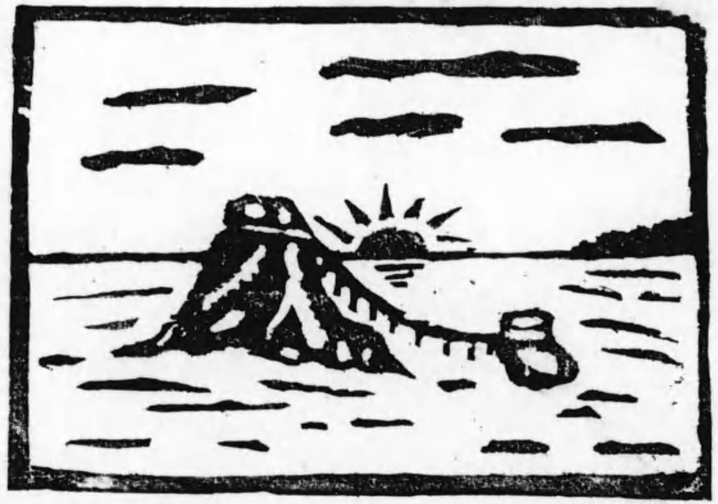


二見ヶ浦

高一　早川敏則

待ちに待つた樂しい今日は旅行かと勇んで午前七時黒澤驛を出發し、それから午後七時までではそれこそ乘物に乘りきりであつたのでいくらすきな乘物でもしまひにはあきてしまつた。午後八時一寸前に旅館に着いたがまだ足がふわ〳〵してゐてうまくあるけなかつた夜は雨の中を二見の町を少し見て來て九時頃ねたが騒いでゐてなか〳〵ねむれず、一時頃ようやくねむりついた。三時半頃目がさめた顔を洗つて裏の海岸に行つて見たら、ちようど滿潮だつたのですぐ足もとまで水が來て居た。中には足袋をぬらした者もあつた。少し見てすぐ宿屋へ歸つて御飯を食べて、こんどは二見ヶ浦の方を見に行つた。海邊は團体の生徒でこん雜してゐた中を濱邊をたひに「夫婦岩」の方を見に行つた。ケーブルカーなどもあつて海の方を見ると雄大な樣があり〳〵と見える。少し行くと大きな岩が幾万か幾億年かの長い間に波の爲に深く穴が堀られて、其の中へどーと物すごい音を立てゝ流れ込み又白砂の上に流れ出る其の物すごい樣はとうてい行かなかつた人にはあじはへぬ所であらうと思ふ。この日はあひにく曇つてゐたので二見の日の出は見られなくて殘念だつた。歸りには二見の町を見物しながら歸つて來たが兩側ともみやげ物の賣店で一ぱいであつた。それから宿屋へ戻つて午前八時五十二分の列車で伊勢の皇太神宮へむかつた。神宮の林の中へ入ると自然に身が改るやうな感じがした。又五十鈴川で手を洗つたりするとなほ一そう感が深くなつたやうな氣がした。それから徴古館へ入つたり、名古屋城を見たりして翌日の午前六時頃無事に黒澤驛に着いた。

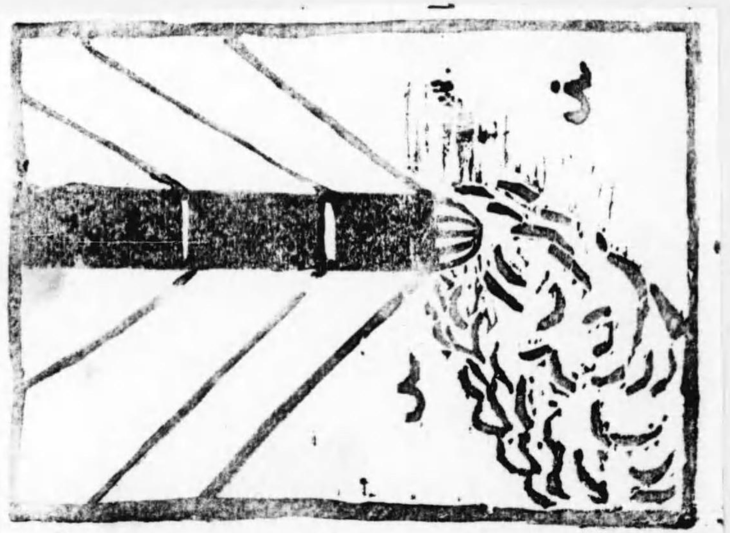
こんどの旅行は面白く又爲になつたよい旅行であつたと思ふ



煙突

高一　中澤文藏

高い煙突そちこちに
朝ははよからけむりはく
高い煙突春の空
春がきたとて煙突は
花もさかずに
たゞ一本
それでもなにかたのしさう
むく〳〵
けむりはく高い煙突その上を
すゞめが二ひき
とんでゐる



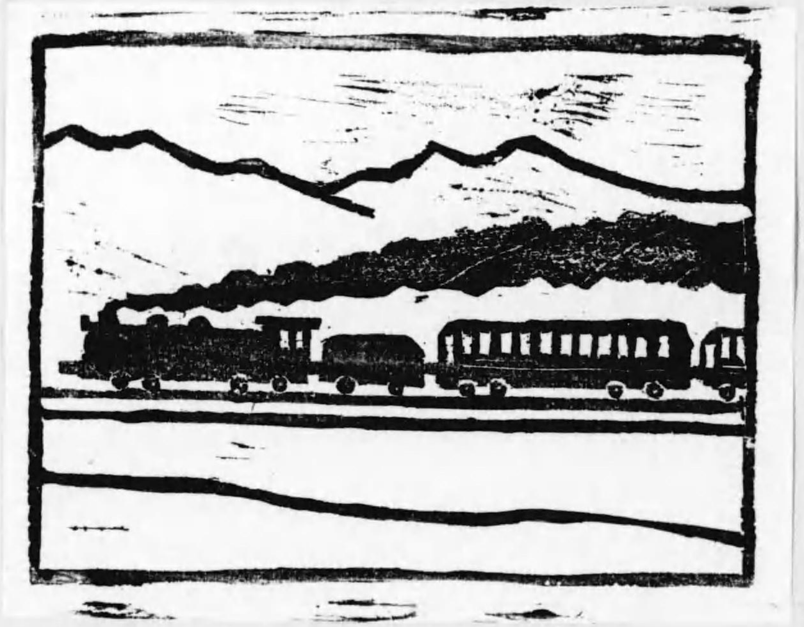
富士山はそこに
湖がありて
湖水の
上に
小さい島が
見える
白帆が一つ
ういてゐる
春風がそよ〳〵
吹いて
波はきら〳〵
と光る

高一　望月市郎

汽車

高一　高橋莊八

旅行中、下り列車で名古屋へ向つた時、僕は汽車の窓から首を出して、かはつた外の景色を見ながら乘つてゐた。汽車は山々を後に、鐵橋を後に、電信柱を後にと進んで行つた。その時何處ら附近で行きあつたのかと、上り列車と、僕等が乘てゐる下り列車ですりあひをした。その時僕は汽車の窓からのぞいた。すると見えたのが機關車と、其の後についてゐる石炭の車だつた。其の後を客車が七車ばかりついてゐた。其の中に上り列車の煙が窓の中に入るので、がらす窓をあげた。それから又二たび開けて上り列車を見ようとして見ると、もう上り列車は遠くはなれて、小さくしか見えなかつた。



鶏

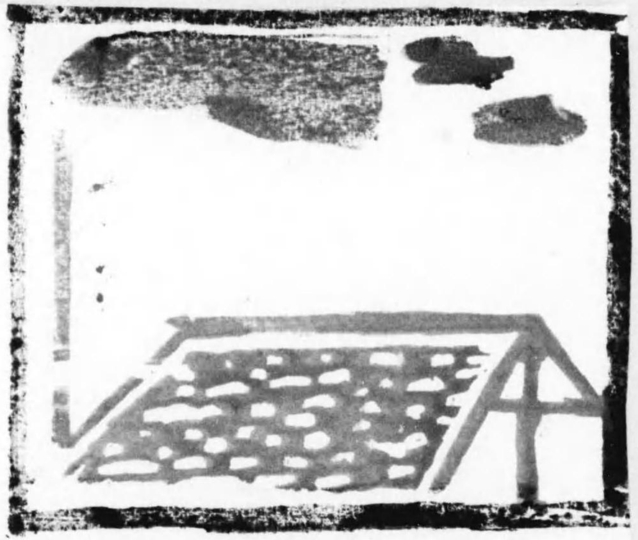
高一望月進

冬の朝
鶏ないて
夜があける
鶏の聲を
きいて目をあく
冬の朝

春の空

高一　秋山豊太郎

春の空、工場の煙が
とんで行く
春の空、工場の煙が真白い
けむりか雲かとまちがへる



列車内にて

高一　齋木清治

暗やみの
長きトンネルを列車はすぎて
のどかな田舎の景色は窓外をはしる
吹きくる春風心地よし
白雲は
廣き青空、列車はゝしる
しづかな山野の景色は窓外をはしる
飛び行く鳥は向ふの森へ

富士

高一　保坂悦三

物干に上つて
四方を見た
おゝ見えた
甲斐の靈峯が
九千萬の民を見下して
果もなき大空に
聳えてゐた

二見ケ浦

高一　深澤文雄

おしよせる波をも、ものともせず
悠々と立つてゐる
夫婦岩
それをおがむ人のかほは
みないきゝとした
大和民族のすがただ

夫婦岩

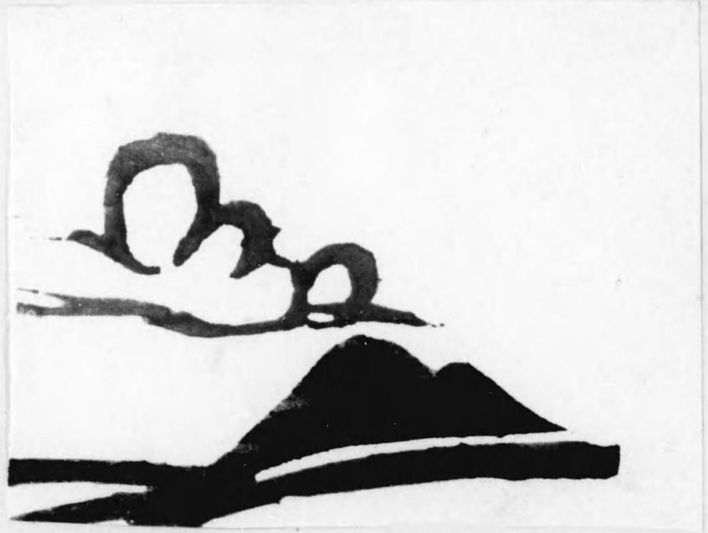
高一　遠藤岩雄

天の岩屋を通りこし
見れば前に夫婦岩
飛び散る波をへともせず
居座る姿の雄々しさよ
夫婦岩を眺めつゝ
進めば石の大鳥居
むねはすきすき氣ははやる
旅の男の子の血はたぎる

雲

高一　中村初男

おもひでの空
水色の晴れた空を
やわらかな雲一つ行く
おもひでの山を
下に見てやはらかな雲
北に流れ行く
おもひでのその雲一つ
ゆるぎなき大地を
見つゝ行く
おもひでの雲よ
宇宙を流れ行く雲
太陽の光をうけて



いさましい國旗

高一　杉山政行

朝學校では、集合の日には大きな運動場に國旗を立てる。その國旗が今日風が吹いて來るたびにひら〳〵と天をつくやうな意氣で上つてゐる。あの國旗こそ日本の大切な國旗である。富士も青空にそびえて立つてゐる。日本の國も何百年か經つとあの富士のやうに大きくなるのだ。國旗も今日學校の庭で青空にきらめいてゐる。

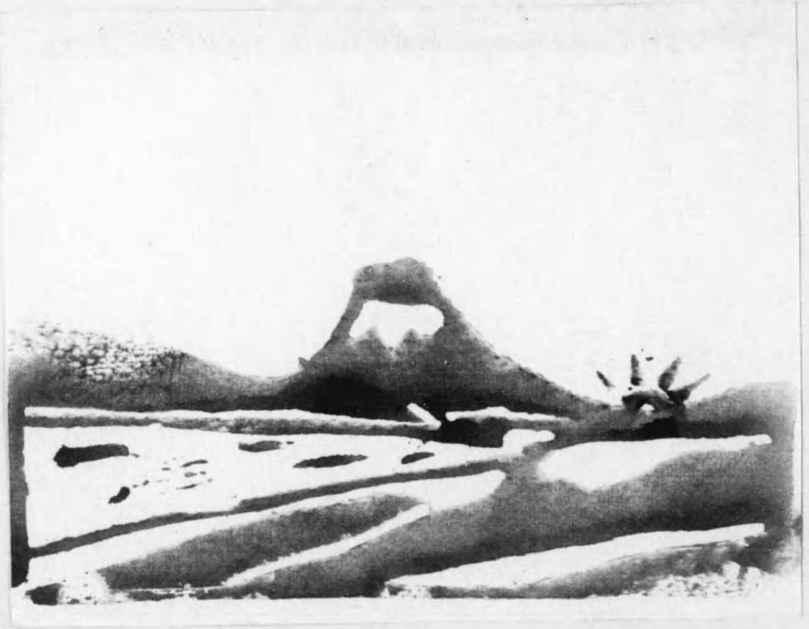
富士の山

高一　山下亀代治

一、みあげた〳〵富士の山
　いつもすがたをみださぬと
　代々につたはる富士の山

二、春になつても白雪かぶり
　いまもすがたをみださぬと
　代々につたはる富士の山

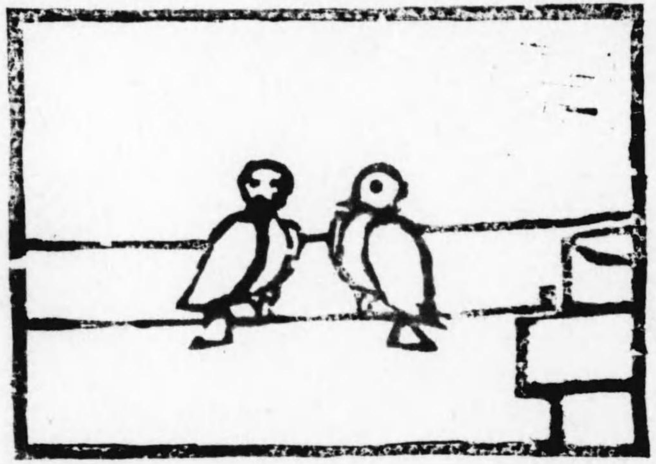
三、富士山よ雲をも下に
　みおろす〳〵さかのぼる小舟



小雀

高一　青柳光雄

小雀が
ふくらんでゐる
寒い朝



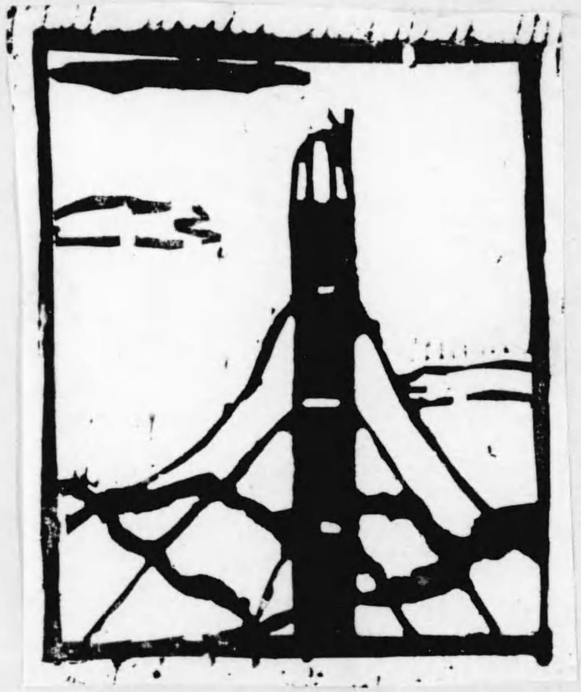
煙突

高一　山田武雄

日曜日の朝だ。

両手にごみの一ぱいはいつたバケツを持つて公園へ捨てに行つた。

ベンチに腰をかけ深澤の眞黑な煙突を見てゐた。水色の空にくつきりと浮いて見えるその先からうす黑い煙がだん〳〵出て來た見る〳〵中に眞黑になつた。入道雲のやうだ。すこしたつと又うすくなつてきえてしまつた。又元の姿になつて水色の空にくつきりと浮いて見える。



高一　福澤愛臣

木枯の吹く中でさへ
ゆるがぬ
おい等のお子屋

日の本にすむ我等

高一　保坂竹造

一、たふとき日本の
　日の本に
　たのしくゝらせ
　われらが日本

二、たふとき日の本
　我等が日本
　國家にかゞやく
　日の丸の旗

來年のキヤンプ

高一　遠藤守雄

夏も、もう近づいた。僕等のキヤンプに行く時も目の前に近づいた。

僕等がキヤンプに行くには女坂峠も越して行く、あの女坂峠は一番えらいのださうだ。

又あの女坂峠も越して富士の近くに立つたその時の氣持は行つた者だけにしか思ふ事は出來なからう。

僕等は來年はその壯快な心持が味はへるのだ。

水兵

高一　遠藤昭能

僕は水兵の繪を見て思つた。日本の國が世界に類なき艦隊をもつて居る。其の下に立つてはたらく水兵達があつてこそ我々がかうして安心して生活出來るのだ。と思ふとあのセーラー服を着て居る水兵さんがなつかしくなる先達ても僕達が横向の方から歸つて來ると一人の水兵さんが自轉車に乘つて來た。僕達は皆止つて敬禮すると、につこり笑つて敬禮した。僕は思つた、世界で一番强い海軍國の水兵さんがやさしく笑つた。やさしく强い日本の水兵さん。我等は其の後をつぐ少年だ。

いざ海軍
萬歲

岩の松

高一　大久保勘次郎

柳川かはらの岩の松
岩の上には松がはへ
うらをながれる水の音
いつもごう〳〵うなつてる
岩のまはりに石があり
僕が見るたびころんでる

山の春の家

高一　芦澤三郎

我等の家は山である
田舍ではたらく、なにが來る
今とさいたか今日の花
夢よりさめた春の今
故郷の風かな木をゆする
なにもさくかな春の山

高一　大森舜一

猫やなぎ
すゞめが一羽
飛びたつた

高一　中込光男

水平線
太陽昇る二見ヶ浦
金龍が
をどりきらめく夫婦岩

雲

高一　樋口静

おい雲よ
馬鹿にゆかいそうだな
どこまで行くのだ
ヅッと西山の方までゆくのか
おい雲よ
馬鹿にのろいな
どこまで行くのだ
ヅッと小室の方までゆくのか
おい雲よ
早く歸らんと日がくれる
お前のお母さんまつてゐる

昭和十年九月二十五日印刷
昭和十年九月三十日發行　〔非賣品〕

山梨縣南巨摩郡鰍澤町一七四〇
編輯兼發行人　土屋寛

山梨縣南巨摩郡鰍澤町一八一五
印刷人　杉山一郎

山梨縣南巨摩郡鰍澤町一八一五
印刷所　杉山印刷所

山梨縣南巨摩郡鰍澤町一一六四
發行所　鰍澤尋常高等小學校葦美學級

あとがき

土屋　寛

詩は呼吸で、版畫は手すさびだ。

人間は生きてゐる限り、何とか、かとか働かずにはゐられないものだ。生きて動いてゐるのが動物で、働いてゐるのが人間だ。

人間とは生産する動物なり――と、よくもいひ切つたものだ

×

常々、働かずにゐられない、五十の兒童の全身全靈的營爲が糾合されてなつたのが、この版畫集「**あかつき**」である。出來上つて見ればこんなに貧弱なものだが刊行の企圖が具體化するまでには、版木の工面から、紙質、紙色の撰定、色の決定が大略決定した所で、印刷所との掛合など、兒童、印刷所、指導者(渡邊訓導)の苦勞は相當のものだつた。

×

「先生、大丈夫やれます。きつとやりきります。」

自分の兒童を譽めるのはおかしいが、まつたく、この「**あかつき**」に名をつらねてゐる五十の兒童は、たのもしい兒童達で一人一人が、おのもおのも、ひとりたかく、花も實もある者ばかりである。

「**あかつき**」の門出を祝つて、あとがきを書くことを得たのは、無上にうれしい。

一〇、七、二

終